

2010 年度活動報告



【ネパールに行ったきっかけ】

きっかけは4月、関ゼミが始まってすぐの関先生と2人で学内を移動中、突然 関先生から一言だった。

「ネパール行かない？」当時の私は、ネパールに関する知識ゼロ。一体どこにある国なのか、どのような情勢の国なのか、全く知らなかった。当然、今の私であれば検討する時間が必要だと感じるが、当時は怖いもの知らずであった。「経験」に対して貪欲だった私は、「はい、行きます。」と、その場で即答。

「ネパールに行こうと思った理由を書く」と宣言したが、実は明確な理由などは無く、知らないことを経験したいという「強い好奇心」ひとつから、全てが始まった。

【マイダン村】

ネパールでは驚きの連続であったが、その中でも特に印象深かった「マイダン村」（電気・ガス・水が通っていない村）での出来事を、今ある記憶に任せて、書いてみようと思う。想像の中にしかなかった「電気・ガス・水が通っていない」村での生活。

それが「現実」になると、衝撃を受けることばかりだった。案内してもらった家は、赤い土で出来ており、家の中にはハエが沢山飛び回っていた。



外では、犬やニワトリが自由に歩き回る素敵な光景が広がっているかと思いきや、道に何やら黄色い物体を発見。よく見ると手の平サイズのイモムシ（！？）のようなものが。

こうした生き物たちを普段見ることは無いので、自然界を身近に感じた出来事のひとつだった。

【ネパールと水汲み】

各家庭に水道も無いため、朝は水汲みから始まる。村に1つある水汲み場に女性たちが集まっていた。しかし、それだけでは十分な水を得ることができないため、子どもを含め若い女性たちは毎日山を1時間下って川に水汲みに行っていた。

水汲み場は「交流の場」になっているようで、女性たちが楽しそうにしているのが印象的だった。女性や子どもが、生きる水のために重労働。世界の貧困の現場を目の当たりにした。しかし当時の私は自分のことに精一杯で、そのようなことを考えている余裕はなく、知識も足りていなかった。



【ネパールに行って学んだこと】



日本では、他人と自分を「比べる」ことが容易に出来る。テレビ、インターネット、SNS…願わなくても他の人の情報が入ってくる環境など。自分よりも恵まれた人の情報にばかり目が行き、自分たちがどれほど恵まれているか気づけないでいるのかもしれない。私たちの「当たり前」の生活が、ネパールの村にはなかった。日本の暮らしがいかにも（物質的に）恵まれているのか思い知らされたが、それは実際に現地に足を運んだからこそ理解できたのだと思う。それをダリさんは気づいていて、「日本人は

差を'体感'することで自国を幸せだと感じる」とおっしゃったのだろう。今回、この記事を書かなければ忘れていた「当たり前」の幸せを、今一度感謝して暮らしていかなければいけないと思った。

ところで日本が幸せになる為に、「差を体感」すること以外に何があるのか。最近、私が魅力を感じるのは、「自分にとっての幸せ」が分かっている人。自分にとって本当に大切なものは何か、どんな時に幸せを感じるのか。その「軸」をしっかりと持つことが出来れば、多量な情報に振り回されず、自分の幸せをしっかりと感じて日々生きていけるのかもしれない。

【ページ作成者】



・荒井みなみ（旧姓：森下）（2012年度卒）

・学部：経営学部流通マーケティング学科

<現ゼミ生へのメッセージ>

この貴重すぎる時間を存分に味わい尽くしてください。私が関ゼミに所属していたのは10年ほど前のこと。その時は、当時の経験が“貴重すぎるもの”だとは思っていませんでした。皆さんも卒業して働き始めたとき、関ゼミでの活動は本当に素晴らしいものだった、と思うはずです。